

4月30日に京都会場にて七段に合格させていただきました。

帰りの新幹線で、清水先生から「合格おめでとうございます。帰りの新幹線ではうまいお酒を飲んでください」とメールをいただきました。「はい、飲んでます」と返信すると、「いくらでも飲んでいいでしょう！」との返信。嬉しかったです。

コロナ禍において、剣連幹部の皆様は稽古の方針を定めるのに苦心なさったと思います。1月の緊急事態宣言を受けて、稽古の参加資格が2月の受審者と大会出場者のみとなりましたが、その方針に納得いかず、東山先生に苦情のメールを送りました。先生からは、丁寧な文面で私の倍の分量のメールと携帯番号をお知らせくださり、その迫力に矛を収めるしかありませんでした。こちらの攻めを受け続け、最後に一瞬の隙を突く吉山先生の攻めに似ているな、と感じたメールでした。あの時期は稽古参加のルールを徹底するために清水先生が毎回参加なさっていました。そのような幹部の皆様の姿勢から、あまり文句は言えないと、納得していましたが、それでもあきらめるか、と一般開放の日に稽古したりしていました。

制限された稽古体制において、栗原先生が指導なさる機会が多かったのが実に幸いでした。栗原先生の攻め方と打ちのタイミングの取り方は、いつ見ても芸術的です。「何で居着いているのがわかるんだろう。居着かされているのか？」などと思いながら拝見し、かかり続けました。栗原先生マジックはまだ解明できていませんので、引き続き探究したく存じています。

安井先生には攻め方の稽古をお願いしました。以前はブルドーザーに三輪車で向かうような感じだったのが、軽自動車くらいになっている状況でしょうか。まだぶつかる度に撃沈されているのですが、つぶれるほどに強くなる、というドラゴンボールの教えを胸にかかり続けています。

昨年来、七段に向けての私の課題は、攻めと打ちだということは強く意識していました。打ちを丁寧にご指導いただいたのは原田先生です。原田先生の面は大きく振っているのにすばやく当たります。私の打ちは刺し面になっているという指摘をいろいろな先生からいただいていたので、原田打ちを習得するこ

とを課題にしました。原田打ちと刺し面を組み合わせて稽古していると、権田先生から「最初の打ちの方が当たってなくても打たれた感じがする」とアドバイスいただき、方向性は間違えていないと思った次第です。目標の半分までも至っていませんが、少しは重みのある打ちができるようになってきていると思います。

私が新宿に通うようになったのは20年以上前になります。その時から伊澤先生の姿は変わっていません。歌丸に対する円楽のように「やるか、じじい」と、そのうちに言いたいと思っていますが、相変わらず「まだ攻めができていないんだよ」と言われ続けるふがいなさ。いつまでもお元気に我々を叱咤していただきたいと思います。

谷口兄弟に結構教えていただきました。弟さんは「一言だけいいですか」と遠慮がちに切り出しながら、駄目出しの連続を彼の重みのある面と同じように繰り出してきます。キツイけど当たっているから仕方ないな、と思いながら、攻めを受け止めていました。谷口兄の方は常に「自分はこうだった」とアイメッセージで教えてくれます。兄弟で剣風は似ているのに、指導の仕方が違うのが面白い、と思いながらありがたく教えていただいていたと思います。

最近の新宿には若手が増えてきました。元気よく、しかもキレイな剣道をする方が多い。「その足さばきは特別に稽古していますか？」と尋ねたら、学生時代から取り組んでいる、という若手がいます。剣道に関するウンチクを語る若手も多い。合宿の夜に剣道ウンチク大喜利をやり、判定を真砂先生にお願いしたら面白いんじゃないか、などと不謹慎なことを考えています。

つまりは、新宿剣連の皆様と一緒に稽古ができたことが、今回の合格につながっていると感謝しているということです。これからも楽しく、厳しく稽古したいですね。よろしく申し上げます。

5月3日

千々布敏弥